

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

第6号

「ままごと」の新聞」は、
柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が
不定期に発行する活動報告紙です。
発行日：2013年4月10日
発行元：「ままごと」

「街と演劇」

まだ旅の途中

柴 幸男

Yukio Shiba

『朝がある弾き語りツアー』は順調に進んでいます。今回は、札幌と仙台の公演について報告しようと思います。札幌と仙台の『朝がある』は、それぞれとても印象深い景色になりました。同じ作品なのに思い出の匂いや色が違うから、不思議な感じです。

札幌は30人ほどで満席になる、雪の一室で公演しました。オノベカという素敵なギヤラリーです。ままごとの公演であんなに小さな空間は、初めて。雪の中、大石と二人で仕込みをしたのは、一つの部屋を劇場に仕立てていくようにとても面白いものでした。

本番では、僕も客席に紛れて、一つのストーリーを全員で囲んだ公演になりました。全員が、目の前の出来事を集中して観ている感じがありました。あんなにアットホームで、そして、笑いの多いままごとの公演は初めてだったと思います。ジンジャーエールやコーヒを片手にお客さんと談笑したのも楽しかった。この公演の感触を『弾き語りツアー』全体に引き継いでいきたい、そう思いました。

仙台の会場は、オノベカの数倍も広い、メディアアテーク1階のオープンスクエア。しかも、ここには壁がありません。隣のカフェも、正面玄関も、表の道路まで（全面ガラス張りなので、どこまでも見渡せる開放的すぎる空間。この風景をどこまで劇に利用できるか、それがこの場所での実験であり、課題でもありました。



仙台メディアテークの舞台はこんな感じ



舞台の向こうにロビーが、街がある



雪の中にあるのが札幌オノベカ



舞台になった一室、窓の外は雪

一緒にシェアしているようでもありました。それは僕らにとって、そしてお客さんにとってもきつと刺激的な空間であり時間でもあったでしょう。

図書館には本が好きな人たちが集まります。図書館は、本を読まない人にも、本を大切に思っている人びとがいることの象徴になっていると思います。劇場もそうであらばいいと思うのです。すべての人に演劇が必要なのではありません。わたしは演劇は観ない、という人がいても構いません。だけど演劇を必要としている人がいることは想像してほしい。そして、その想像は、いつか自分が、何かを必要とする可能性も想像させるはず。それが美術なのか、音楽なのか、料理なのか、スポーツなのかは分かりません。でも、いつか自分が、家族が、友人が、何かを必要とするかもしれない。いや、今も、しているかもしれない。そう想像できれば、そのすべてを尊重することができるはず。そう僕は思います。自分が今、必要としないからといって、他人の現在を、自分の未来を、否定することはできないはず。

さて、『朝がある』の旅はまだ続いています。これを書いている今、ぼくらは小豆島の坂手港にいます。この港でも急遽公演することになりました。どんな弾き語りライブをするように公演ができるようになってきています。それは今回の目標の一つだったので、うれしいです。大阪では古本屋さんで公演をします。一見見て、ここでやりたいと思ったすてきな場所です。今回のゲストコラムはその本屋の店長である吉村さんに書いてもらいました。三重では元幼稚園だった劇場で公演します。数日間自分たちの劇場に作り変えたいと思っています。

最後に公演するのは湘野辺の桜美林大学です。湘野辺での公演は、この長い旅の報告になるでしょう。それが作品の中で語られるのかどうかわからないのですが、全国の朝はどんな蓄積されています。

Yukio Shiba
82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に『ドミニ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わが星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞。同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

百年続く古本屋を 吉村祥 (FOLK old book store 店主)

from 大阪



地下のイベントスペースでは、食・音楽・演劇・トーク・展示など多種多様なイベントを開催中。
(<http://booklife.old-folk.shop-pro.jp>)

大阪でFOLKという名前の古本屋をやっています。始めてまだ2年と少し。始める前、FOLKという名前もまだないころに友達とケンタッキーフライドチキンでどういうお店にしたいか、あだだこうだと話していました。「せつかく始めるなら百年はやりたいね」と話したのを覚えています。ほとんど子どもが瞬発力で言っちゃうみたいで（一万年って言うのと変わらないノリで）言ったけど、ずっと胸に残っている。いま、実際に百年やりたいと思っています。子どももつばいかもしれませんが、百年という数字にあこれと恐れとロマンを感じます。ほとんどの人が百年生きられないじゃないですか。物に聞しては今ここにいます。すべてが一新されているような気もするし、ほとんどが残っているような気もする。FOLKはライブをしたり展示があったりカレーを食べるイベントがあったり、今回みたいに芝居をしたりというイベントをやっています。イベントによってさまざまな人が来られるし、本の品ぞろえも内装もどんどん変わっていく。生き物と物の両方みたいやなと思います。百年生かしたい。

26歳でお店を始めたので実際126歳まで生きないと百周年を見られないわけです。それでもその瞬間を見たい。医学がすごい進んだとしても126歳のぼくはきつと相当よばよばで、孫かひ孫に抱えられながら「いろいろあったなあ」って思いながらビールを飲んでその光景を見渡したいです。子どももまたいにニヤニヤしながら。

吉村祥 (Sho Yoshimura)
古本と喫茶の店FOLK old book store 店主。最近の口癖は「もつな」に屋から分かんなくなってきました。